

令和 元年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21481

研究課題名（和文）英語によるリーダーシップと発信力を醸成する授業運営モデルの考案及び電子教材の開発

研究課題名（英文）Construction of a student-led classroom model to cultivate leadership and skills to send out messages and development of classroom materials

研究代表者

近藤 雪絵 (Kondo, Yukie)

立命館大学・薬学部・講師

研究者番号：30722251

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、授業の活動をミーティングに模し、専門家を含めた討論会スタイルで行うことにより、学生のリーダーシップと発信力を醸成することを目的とした「ミーティング・スタイル・クラス」の授業モデルを作成した。また、学習者と教員がミーティングの参加者として効果的に情報を発信、受信、共有するための教材を開発し、専用ウェブサイトで一般公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミーティング・スタイル・クラスは、ファシリテーター役を含む授業の主導権を教員から学習者に譲渡し、学習者がキュー（合図）を出す側になる授業運営であり、教員のキューの元で学習者主導を実現する授業とは一線を画す。このような授業モデルとそれに付随する教材を広く公開し、授業以外での応用可能性を提示したことにより、即戦力としてグローバル社会で発信できる人材の育成に貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this practical research is to construct a student-led classroom model called MEETING-STYLE CLASSROOM, where classroom activities are treated as those in a meeting. MEETING-STYLE CLASSROOM is designed to transfer the entire initiative in the class from the teachers to students, including the facilitators' role, instead of the teachers prompting them to work in groups. We have developed classroom materials for both students and teachers to communicate information during a meeting. These materials are available online.

研究分野：教育工学 / 外国語教育

キーワード：外国語教育 リーダーシップ 教育学 ミーティング 発信力 英語力 教授法

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

グローバル化の進展に伴い、英語を公用語化する企業が後を絶たない。2012年に楽天、ファーストリテイリングが英語公用語化を本格導入したのを皮切りに、日本企業の社内英語化志向は加速度を増した。シャープは研究部門での英語公用語化を発表し、三井物産、三菱商事などの商社でも若手社員の海外研修が義務化されることが報道された。これに伴い、昨今指摘されつつある問題として、日本のビジネス・パーソンが英語で主導権を取ることに苦戦していることが挙げられている。これは英語力の課題もさることながら、英語で議論を進める手法を知らず、また英語で行うミーティング等の経験も少ないことが要因となっており、結果的に日本語で議論を行っていた頃と比べて発信や提案が減り、それが生産性や運営に影響しかねない状況となっている。日本の大学英語教育では、学生が授業で研究成果を発表することはあるが、英語でミーティングを運営する手法を授業内に取り入れ、学習者に主導権を譲渡することにより発信力を醸成するアプローチはまだ報告を見ない。しかしながら、グローバル化の波はすでに学生の足元にまで及んでおり、今後、英語で主導権を取り、発信していく力がますます求められることは必至である。

本研究は学習者主導の授業をミーティングに模し、専門家を含めた討論会スタイルを行うことにより、学生のリーダーシップと発信力を醸成することを目的とする。ミーティングを模した授業（ミーティング・スタイル・クラス）は「協同学習」の理念に基づき、中でも Kagan (2011) が協同学習の条件に挙げる“Positive Interdependence（肯定的な相互依存）”“Individual Accountability（個人の責任）”“Equal Participation（参加の平等）”“Simultaneous Interaction（同時に起こる相互交流）”を具現化することを目指している。この授業において、学習者は討論会の進行に付随する役割と責任を担い、他のクラスメートとの相互協力により議題を遂行する。これまで、協同学習に基づいた学習者主導の授業は Learning by Teaching、Reciprocal Teaching、Leader Method など数多く実践されてきたが、多くの場合において教員はファシリテーターの役割を担っていた。しかし、教員の合図の元でグループ活動を行うのではなく、ファシリテーター役を含む授業の主導権を教員から学習者に譲渡し、学習者がキュー（合図）を出す側になってこそ、真のリーダーシップと発信力の醸成は可能となると本研究者は考える。また、教員は「専門家」という立場でミーティングに加わり、時には学生を見守りながらアドバイスやフィードバックを与え、またある時には積極的に学習者の議論に参加し、専門家として必要な講義を行う。本研究は任務遂行のための主導権を取る仕組みを取り入れることに重きを置いた点で、教員のキューの元で学習者主導を実現する授業とは一線を画す。

参考文献

Kagan, S. The "P" and "I" of PIES: Powerful Principles for Success. San Clemente, CA: Kagan Publishing. Kagan Online Magazine, Fall/Winter 2011. www.KaganOnline.com

2. 研究の目的

本研究は英語によるリーダーシップと発信力を醸成する授業運営スタイルをミーティング・スタイル・クラスと名付け、授業モデルを作成し、学習者と教員がミーティングの参加者として効果的に情報を発信、受信、共有するための教材を開発することを目的とする。実践を通じたプロトタイプ確立と教材の改善を経て、それらを広く公開し、英語の授業以外にも広く応用可能なモデルを提示することにより、即戦力としてグローバル社会で発信できる人材の育成に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

異なる授業（1. 学部・学年横断型ゼミナール、2. 高学年対象の専門英語授業）にミーティング・スタイル・授業を導入し、実践を通じた授業モデルの確立と教材の開発を行う。2年に亘る実践の中で、教員・学習者双方のフィードバックを元に授業モデルと教材に修正を加え、改善する。授業に「専門家」という立場でミーティングに参加する教員が、学習者の発信力育成という点でどう貢献できるかを、英語教員・専門教員という異なる立場から考察する。

作成した授業モデルと教材をオンラインで広く公開し、他分野への応用可能性を探る。

4. 研究成果

（1）実践を通じた授業モデルの確立

① 2016年度：学部・学年横断型ゼミナールでの実践

英語によるリーダーシップと発信力を醸成する授業運営モデルを「ミーティング・スタイル・クラスルーム」と名付け、PBL型のゼミナール（全15回）に導入・実践し、ミーティング・スタイル・クラスのプロトタイプを作成した。該当のゼミナールは学部や学年が異なる学生が調査、討議、発表を中心として学習する教養科目に位置づけられ、自らの専門への自覚を高めるとともに、他の専門の特色を理解することで、より広い視野で自らの専門を見ることができるよう人間になることを目指したものであった。具体的な授業到達目標は「自分が人より少し得意と思えること・詳しいと思えることをコンテンツとし、成果を英語で発表できるようになること」「ミーティングを進行、ミーティングに貢献できること」「コンテンツ、発表、ミーティングの進行についてフィードバックを与え合い、自分たちで改善する力を身につけるこ

と」であった。受講者数は12名で、毎週交代でミーティングに付随する役割（チェア、タイムキーパー等）を担当し、ミーティングの参加者全員で協力しながらアジェンダ（議題、授業プラン、到達目標）に基づいてタスクを進行した。教員はアジェンダをデザインし、授業内で必要な講義を行いながら、学生のミーティング運営を補助した。

全授業の終了後に受講生にアンケートを行い、授業の到達目標についてどの程度実現できたかを尋ねた。コンテンツを作り、成果を英語で発信することに関しては全員が「できた」と回答した。ミーティングへの進行・貢献に関しては7名中4名が「チェアとして会議をリードできた」と回答した一方で、1名は「どちらとも思わない」2名は「あまりできなかった」と回答した。また、オーディエンスやクラスメートとしてミーティングに貢献したかに関しては全員が「できた」と回答した。改善する力に関しては、全員が「フィードバックを与えることができた」と回答し、7名中6名が「フィードバックを元に自分のコンテンツや発表を改善した」と回答した。

コンテンツを作り成果を発信すること、ミーティングに貢献すること、互いにフィードバックを与えることで自分のコンテンツや発表を改善することに関しては、ほぼ全員が肯定的に捉え、受講生の「できた」という実感は高かった。また、役割を明確にし、アジェンダに基づいてミーティングを進行することで個人の責任が明確になり、どの役割の学生も同時に協力しながらミーティングに貢献した。さらに、タスクの実行だけでなく、互いにフィードバックを与え自分のコンテンツや発表を改善することで、相互協力・相互改善の実感は得られたと考えられる。一方で、リーダーシップを取ることは実感が伴わない学生もあり、これに英語力が影響するかを含めたリーダーシップ力の検証が今後の課題であると考えられる。

② 2017年度：高学年向け専門英語授業での実践

ライフ・サイエンス分野の学部生3年生以上対象の「専門分野のテーマを基にプロジェクトを行い、その成果を英語で発信すること」を目標としたPBL型英語授業（全15回）で実践を行い、授業を通じて学生が専門分野における英語発信力を醸成する際に、専門分野の教員と英語教員がどのように協働できるかを考察した。

授業の中で学生は自身が興味を持つ専門領域のテーマに関するプロジェクトを立ち上げ、その成果を英語で発信した。授業は学習者主導で行われ、コンテンツに関しては主に専門教科の教員が、発信に関しては主に英語教員がアドバイスをを行った。最終の成果発表について専門分野の教員、英語教員、授業を担当していない一般の社会人が「感銘を受けたか」「自信が感じられたか」「関心が明確であったか」「自分なりの意見があったか」「社会との関わりが明確であったか」という項目に関して評価とコメントを行った。これについて項目全ての評価（各5点満点）に正の相関が見られた。評価者グループ内で評価項目の相関分析を行ったところ、専門分野の教員は発表に「自分なりの意見」が見られるほど、英語教員は「社会との関わり」が見られるほど「感銘」を受ける傾向が見られた。一般の社会人内では特に突出して相関の高い項目はなかった。また、各評価項目の平均点を評価者グループ間で比較したところ、専門分野の教員は「関心」を他グループより高く評価していることがわかった。自由記述では英語教員は発表のデリバリーに関する改善点を指摘し、全評価者グループを通じて発表者の「自信」に対してはポジティブなコメントが見られた。

専門分野の研究者に感銘を与えるには、「関心」を明確にすることが重要である一方で、「関心」が明確でも「自信」が感じられない発表者は、専門外の社会人や英語教員からそれほど高い評価を得なかった。この結果により、専門分野の教員は学生のテーマの絞り込みや深め方、英語教員は深まったコンテンツを広く発信する際にどう社会に関連させ、自信を持って伝えるかという点でアドバイスをを行うことで、互いの教員としての役割が明確になり、学生の発信力の育成に貢献できることが示唆された。

（2）教材開発

ミーティング・スタイル・クラスの運営に必要な教材を開発し、改善を重ねた後に、パッケージ化した。教材には毎回の授業をミーティング・スタイルで行うためのアジェンダ（学習者・教員の双方が使用）と、ディスカッションを英語で行うための英語フレーズ集を作成した。フレーズ集にはネイティブ母語話者による音声をつけた。使用方法を記したマニュアルを含め、教材は日本語・英語の二言語で作成した。

本研究は即戦力としてグローバル社会で発信できる人材の育成に貢献することを目指すため、学習者と教員が授業内外で効果的に情報を発信・受信、共有するための方法として、大学のコースツールに替え、ビジネス・コラボレーション・ツールであるSlackを導入した。Slackは上記の授業外でも学生とのコミュニケーションや課題の投稿に実験的な導入を行った。学生にSlackの使用に関するオンライン・インタビューを行った結果、学生はSlackでのコミュニケーションをWritingよりSpeakingに近いものであると捉え、インタビュー回答者の9割以上がSlackの利用に対してポジティブな意見を持っていることがわかった。これまで作成した教材をSlackを通じて活用することにより、ミーティング・スタイル・クラスは大学の授業以外のミーティングやプロジェクトにも広く応用可能なモデルとなったと考える。

(3) 授業モデルと教材の公開

ミーティング・スタイル・クラスの専用ウェブサイトを作成し、ミーティング・スタイル・クラスの概要、全15回の授業モデル、必要な教材（アジェンダ等のテンプレート、サンプル、フレーズ集）、教員・学生のコメントを付けた実践報告、授業の動画等をまとめたものを一般公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 近藤雪絵, 木村修平, 山中司, 山下美朋, 井之上浩一. (2017). 学際的な team teaching による学生の英語発信力育成: 薬学専門教科の教員と英語教員はどのようにコラボレーションできるか. 第2回 日本薬学教育学会大会.
2. Kondo, Y., Kimura, S., Yamashita, M., Yamanaka, T. (2017). Designing a new assessment model for project-based English education program in a Japanese university. AILA The 18th World Congress of Applied Linguistics.
3. 近藤雪絵. (2016). リードするのは学生、デザインするのは教員。—学習者主導の授業運営を実現する「ミーティング・スタイル・クラスルーム」—. 全国英語教育学会 第42回 埼玉研究大会.

〔その他〕

ホームページ

Meeting-style Classroom

<http://me.engstudio.jp/>